



PHJ NEWS LETTER

ピープルズ・ホープ・ジャパン
ニュースレター

CONTENTS

国際保健のとびら

そもそも、助産師とはどういうひと？

今号の先生：北里大学 看護学部 准教授 吉野八重

国内事業

東日本大震災支援、熊本地震医療支援募金報告

支援企業訪問レポート

「良き市民として」

日本ヒューレット・パッカー株式会社

海外事業

「助産の力をのばす支援」

カンボジア：准助産師能力強化

トレーニング

ミャンマー：助産師・補助助産師会議





Cambodia



Myanmar



Japan

助産の力を伸ばす支援

お産の現場で活躍する「助産師さん」の力を強化をすることは、より安全なお産を支援することに直結します。PHJカンボジア事務所とミャンマー事務所で実施している「助産師」の力を強化する活動を紹介します。

カンボジア

実践力をつけて信頼される助産師に。

准助産師の能力強化トレーニング

〈背景〉

カンボジアでは内戦の影響で不足している助産師の数を増やすため、1年間の速成の助産教育を受けた「准助産師」が保健センターに大勢配置されています。しかし臨床経験を十分積んでいない准助産師さんは、自信を持ってお産を介助できないために、地域住民からの信頼が得られないことが多く、助産師の質の向上が課題になっています。



ミャンマー

お産の現場の把握と意識向上に。

助産師・補助助産師会議

〈背景〉

PHJの活動地であるミャンマーの農村地域では、医療環境や医療人材が不足しているため、自宅出産が一般的です。しかし万一の際に適切なケアが受けられないため、出産時に母も子も危険にさらされます。助産師や補助助産師（分娩介助の補助や母子のケアを行うボランティア）による施設での安全なお産を増やしたい。その一つの糸口として助産師・補助助産師による現場の情報共有や問題把握の場をつくりました。



〈活動内容〉

PHJでは支援地の保健センターに勤務する准助産師を対象に、能力強化トレーニングを実施しています。トレーニングは、5日間の講義と30日間の病院での実習。その後、リフレッシュトレーニングも実施しています。病院の実習ではそれぞれが10件のお産に立ち会い、介助しました。とくに臨床経験の少ない准助産師さん達にとって実地で指導が受けられる実習はとても重要です。

▼2016年の成果▲

講義形式のトレーニングを10名が受け、そのうちの4名が第2週目から少人数での病院実習を行いました。



〈活動内容〉

助産師・補助助産師が参加できる会議の場を実施するようにしました。会議では、現状の把握と問題点の洗い出し、そして改善策を話し合います。たとえば、あるときの会議のテーマは「搬送」。助産診療センターといった施設での分娩を奨励するには、農村地からの搬送の問題を解決しなければなりません。農村の人々は、まず車を所有していませんし、交通費にお金をかける余裕がありません。一方で医療機関側は救急体制も整備されていないため、農村地にすぐに医師や看護師が駆けつけるといったことも難しい状況です。

こうした問題を洗い出した結果、助産診療センターに移動手段を設ける（台数に関しては議論の余地がありますが）のが現実的という案が見えてきました。



VOICE

トレーニングを受けた准助産師さんの声



准助産師 ネット・スレイネさん（1年前に講義と実習を受講）。
「講義では分娩時出血や妊娠期間中の危険兆候について詳しく知ることができ、実際の業務でもその知識を活かして、ハイリスクの妊婦さんをきちんと地方病院に照会できるようにになりました。」

活動をふりかえって

PHJカンボジア事務所長 中田好美



准助産師が村人の信頼を獲得するには、准助産師の技術面の向上だけではなくサービスの質を向上させることが必要だと考えています。そのためにトレーニングの中で対話能力の向上を図ることを考慮しながらトレーニングを行っています。

▼これまでの進捗▲

2016年9月よりPHJの支援地内の4つの助産診療センターでそれぞれ実施。2回目を開催した地域もあり内容がより深掘りできるようになった。

活動をふりかえって

PHJミャンマー事務所長 真貝祐一



会議を実施する前は上手く意見が出る心配でしたが、ファシリテーターが非常に素晴らしく、意見を引き出してくれて助かっています。今後は助産師・補助助産師たちがより自発的に意見を出し合い、浮かび上がった課題を彼女たちの言葉で議論することで、今より自分たちのこととして問題意識をもつてくれることを期待しています。助産師さん達のモチベーションをどう上げていくか、議論した課題をどう支援に繋げるかを日々考えながら仕事をしています。



東日本大震災から6年、復旧工事は急ピッチで進むなか、気仙沼や石巻でも災害公営住宅が完成し、仮設住宅の閉鎖と集約化が進んでいます。これは、仮設住宅に住む人たちが震災後ともに暮らしてきた仲間と別れ、新たな環境の変化に直面することを意味します。ストレスで家に閉じこもりがちになり、特に一人住まいや高齢者の中には認知症、うつ病、アルコール依存症が増えてきました。

PHJが実施してきた気仙沼や石巻の被災病院への医療機器寄贈による復興支援。現在は対象となる医療機関の復興がほぼ完了し、今後は生活不活発病やストレスによる健康状態の悪化等で苦しんでいる被災者の自立支援に取り組んでまいります。

被災者を対象にした地域の包括ケア支援

東日本大震災支援のこれから

気仙沼・石巻



2011/3/15～2016/12/31の東日本大震災寄付金の収支 単位(万円)

収入	現金寄付	14,359
	物品寄付(医療機器・事務機等)	20,837
支出	医師派遣費・医療機器調達費	10,670
	物品支援(医療機器・事務機等)	20,837
	輸送費・スタッフ活動費	2,759
残額	復興支援に使う予定	930

現在被災者に必要とされているのは包括的なケア。たとえば、石巻市の取り組みの一つ「石巻まちの保健室」。イオンモールで健康診断を定期開催することで、隣り合った人が気軽に話せる「場」づくりを目指しています。PHJは血圧、体脂肪、血管年齢、肌等を測定する医療機器の寄贈を予定しています。また、気仙沼医師会からの要望で災害時、孤立化した場所からへり救助を求める災害時施設状況伝達の横断幕「SOSシート」の支援も予定しています。現在もPHJの東日本大震災支援にご協力いただいている企業・個人の皆様がこの場を借りて深く御礼申し上げます。支援活動は2017年12月までを予定しています。



熊本県熊本地方を震源とする地震においてPHJは医療支援の募金活動を2016年4月22日に開始し、同年12月28日に終了しました。寄付総額は1686万7482円でした。皆様のあたたかいご支援、心より感謝申し上げます。頂いたご寄付は公益社団法人全日本病院協会を通じ、震災直後は災害時医療支援活動班(AMAT)の派遣、必要な食品、水、おむつなどの物資の輸送に使われました。その後は熊本県と大分県における被災した病院の復興支援に使われました。支援した病院は熊本県で57病院、大分県で2病院の計59病院となります。

熊本地震医療支援募金

熊本

終了のご報告と募金へのご協力の御礼

そもそも助産師さんとはどういう人?

今号の先生：北里大学 看護学部 准教授 吉野 八重

聖路加看護大学卒業、ロンドン大学 MSc(公衆衛生修士、熱帯医学ディプロマ)、北里大学 PhD(医学博士)。PHJ 運営委員。国内の病院、クリニックでの勤務経験を経て、JICA 母子保健・助産専門家としてブラジルに赴任。その後もスマトラやイランの震災後の看護支援や、モンゴルの看護教育支援や母子保健人材育成など、多岐にわたり国際的な活動を続けている。



PHJ Q1 開発途上国では助産師さんが広い範囲で活躍しているように思えます。そもそも助産師さんの仕事とは?



双子を出産した若いお母さん(モンゴル)

吉野先生 A1 国際助産師連盟では「助産師は、女性の妊娠、出産、産褥の各期を通じて、サポート、ケアおよび助言を行い、助産師の責任において出産を円滑に進め、新生児および乳児のケアを提供するために、女性とパートナーシップを持って活動する。(中略)助産師は、女性のためだけではなく、家族及び地域に対しても健康に関する相談と教育に重要な役割を持っている(後略)」と定義しています。

PHJ Q2 ブラジルをはじめ海外で母子保健の専門家として活動してこられた吉野先生。各国のお産や助産師さんの印象を教えてください。



参加型妊婦教室のトリアル風景(ブラジル)

吉野先生 A2 「ブラジルのお産」の特徴は、帝王切開率が世界一高く、富裕層で90%、貧困層でも40以上。痛みの閾値の低さ、陣痛やセクシャリティに対する価値観の違い、医師が仕事を掛け持ちしていること、保険制度の違いなどが背景にあります。「モンゴルの助産師」は、自立心が強く応用力に長けています。70年近くコメコン下でロシアの影響を受け助産教育が遅れていましたが、近年、妊産婦、乳幼児死亡率が下がりました。それは新しい知識を吸収し、創意工夫する助産師たちの意欲があったからといえます。男性助産師もいて活躍しています。「カンボジアの助産師」は、機材や薬剤が不足する厳しい環境でとても頑張っていました。歴史に翻弄された深い傷をもちつつ、新しい知識・技術を学び、より良いケアを提供したいという意欲の高さが印象的でした。

PHJ Q3 最後に日本の助産師さんの強みを教えてください。

吉野先生 A3 伝統的な技、科学的根拠に基づく専門知識、女性に寄り添ったケアができること、卓越したおっぱいケアの技術などです。また助産師の「開業権」があることも強みです。欧米諸国でも開業権が認められているのは、ごく一部の数か国。これは残すべき財産だと思いますが、高齢初産やハイリスク妊婦の増加で、なかなか難しい問題もあります。

PHJ 住民の健康まで幅広いケアをする助産師さん。医師の少ない開発途上国では特に不可欠な存在ということがわかります。助産師さんの職業の可能性の広さを感じました。吉野先生、ありがとうございました。



支援企業訪問

「よき市民」として
主体的に活動する社員を。

日本ヒューレット・パッカード株式会社



グローバルなIT企業として成長しつづける日本ヒューレット・パッカード(株)。PHJの賛助会員として、社内でのカレンダー募金などさまざまな形で支援していただいています。東日本大震災の支援活動ではパソコンの寄贈とともに、ソフトウェアのインストール作業を社員の方がボランティアで行っていただきました。社員一人ひとりがボランティア活動に積極的に取り組んでおられる日本ヒューレット・パッカード(株)の社会貢献への想いをうかがいました。

日本ヒューレット・パッカード株式会社
社長室・コーポレートコミュニケーション本部 岸良百子様



社員が主体的に活動することが重要

創業時から地域社会に貢献する責任があると考え「よき企業市民」であることを、会社の目的の一つとして掲げてきました。社会貢献は社員全員が行うものという創業者の言葉を受け継ぎ、日本を含む世界各国で社員がボランティア活動に参加しています。とはいえ、強制的ではなく、社員が主体的に活動することが重要だと感じています。

東日本大震災でボランティア活動がさらに活発化



釜石市でのビジネスコミュニケーション講座の様子

特に弊社では、2011年の東日本大震災がきっかけとなり、多くの社員がボランティア活動に参加しました。瓦礫の撤去から始まった岩手県の被災地域への支援は今も続いています。都内へ避難された方を対象としたパソコン講座や、釜石で仮設住宅に住む人々をサポートする団体やNPOを対象にビジネスコミュニケーション講座も行っています。ありがとうございますと感謝されたり、仕事ではつながらない社員同士が会えたり、と利害関係を抜きにした喜びが得られるようです。

社会問題とその解決策について考える環境づくり

弊社では、世界中の社員がボランティア活動を行った時間を登録すると、その時間に応じて寄付できる仕組みがあります。また、ここ2年ほど新入社員研修で社会貢献の実践プログラムを実施しています。高齢の方や障害のある方の施設やNPO、あるいは福島県の被災地域でボランティアを体験し、地域社会のニーズを理解し、社会人としてできることを考えてもらうのです。IT企業の一員としてITを通じて社会課題の解決に貢献する、そんな視点を持って仕事に取り組んでもらうきっかけになればと思います。

PHJの地道な取り組みを応援したい

PHJの活動がすばらしいと思うのは、文化や生活習慣が異なる地域の人たちの中に入り込んで、地道に母子保健の教育に取り組んでいることです。PHJの駐在員の方のお話を聞いたり、広報誌を読むたびに、正しい保健衛生の知識を浸透させるため、日々奮闘されている様子に感心するとともに、こうした地域に根ざした息の長い活動が、社会の課題を解決していく一歩になっていることを実感します。これからもますますがんばっていただきたいですし、私も応援してきたいと思っています。

PHJ Circle

PHJ の 輪



HOPEパートナー 翻訳ボランティアさんの声

昨年12月タイ事業の終了とともに、現地移管した障がい児慢性疾患児支援事業「HOPEパートナー」。支援者の方に、患者さんの状況を定期的に報告する際、タイ事務所からの英文レポートをボランティアの方が翻訳してくださっていました。これまで何人ものボランティアの方に関わっていただきましたが、お二人の方から最後にメッセージをいただきました。



◆白倉 佐恵子様



翻訳のお手伝いをさせて頂いて約2年半。微力ながらもお役に立てる機会を頂きましたこと大変感謝しております。6名の患者となる子供達を担当し、次第にレポートを通して子供達の成長を間接的に見守る気持ちが増して参りました。レポートは終了となりますが今後も子供達のお幸せを心よりお祈りいたします。

◆大橋 乙恵様



私は約一年半の翻訳のお手伝いでしたが、病氣と懸命に向き合う子供達の写真と手紙を読むにつけ、辛そうな写真を見ては心が痛み、回復に向かうレポートや笑顔の写真ではホッとしました。このような子供達を支援するPHJの事業は素晴らしいと思います。世界中の子供達の幸せを祈り、毎日感謝して過ごしたいと思えます。

こんにちは、
さようなら！
PHJ STAFF

新しい仲間が増えました！

志田 保子 海外事業部
2016年10月に入職しました。現在は、カンボジアで保健センターのサービス改善、特に准助産師のトレーニングに関わっています。准助産師は高校卒業後に専門教育を一年だけ受け、すぐに村の保健センターに配置されます。勤務してから学ぶことができ、十分な教育を受けていないのが現状です。村で母子の健康を守る准助産師を全力でサポートしていきたいと思えます。よろしくお願いたします。



カンボジア保健センターにて。一番右側

退職のご報告

塩田 勝雄 管理部 総務人事
2016年12月退職



人事の仕事と企業の賛助会員を募る募金活動をしていました。人事面ではスタッフみんなが楽しく働き、気分良く動いてもらえるよう配慮してきたつもりです。やりがいを感じたときは、支援地で草の根の地道な活動を自分の目で見た時です。これからも困っている人たちに手を差し伸べていけるよう、支援の灯が消えることなくずっとPHJの活動が続くことを願っています。

蓮見 雅彦 海外事業部
2016年12月退職



タイ・ベトナム事業を担当し、現地と協働してプロジェクトを企画し、実施してきました。なかでもベトナムの乳がん自己触診検診プロジェクトで、ベトナムウィメンズユニオンと連携できたことはとても刺激的でした。プロジェクトを通して現地の受益者と支援者のハッピー、そしてPHJ本部と現地スタッフのハッピーを大切にしていってほしいと思います。

PHJのお知らせ掲示板

20周年を祝う「感謝の集い」を開催しました

2017年1月にPHJは創立20年を迎えましたが、記念行事として2016年8月25日に「感謝の集い」を開催しました。これまでPHJを支えてくださったさまざまな方々にも来ていただき、スピーチを聞いたり、映像を見たりしながら、20周年を迎えられた喜びを分かち合いました。



頂いたメッセージの一部をご紹介します。

■ 田中 滋副理事長（創立以来の理事）

PHJの20年にわたる活動の成功要因は、①困った人をただ助ける活動ではなく、自立支援の姿勢を貫いていること、②現地スタッフを支える本部のスタッフが企業人として経験を活かしマネジメント能力が高いことが挙げられます。

■ 鈴木 周志 横河電機（株）常務執行役員

当社はPHJ発足以来、「すべての人々に健康と希望を」というミッションに賛同し、様々な形で支援しています。今後の世界で大きな成長エンジンとなるアジア途上国で、PHJが基礎となる「人」の健康と健全な成長に関与できていることは、我々サポーターにとって大きな誇りです。

事業終了ともなうタイ、インドネシア事務所閉鎖のご報告

タイ、ベトナム、インドネシアの事業は現地に移管後終了しました。ご支援頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

タイ事業の終了とタイ事務所の閉鎖： 2016年10月末

1998年に開始した4つの事業は当初の計画通り現地に移管し、2016年10月末にタイ事務所を閉鎖しました。事務所閉鎖にあたり、PHJ 廣見代表とタイ担当の蓮見部長がチェンマイ（タイ）を訪問し、タイ事務所長ジラナンはじめスタッフ全員に感謝状を手渡しました。

インドネシア事業の終了と インドネシア事務所の閉鎖： 2016年12月末

1999年から母子保健分野を中心に教育支援事業を実施してきました。2015年から新規事業開始を予定していましたが、活動許可証更新の遅滞により長期の事業停止が発生。その後もインドネシア保健省から更新に対する新たな要求事項が出てきたことから、事業の継続は困難と判断し、2016年12月末でインドネシア事務所の閉鎖を決定しました。より詳細な報告は別紙をご覧ください。

PHJ bulletin board

編集後記

リニューアル創刊号、いかがでしたか。今後は年2回の発行となりますが、より充実させてまいりますので、本誌へのご意見や取りあげたいテーマなどありましたらご連絡ください。また、PHJの紹介パンフレットをリニューアルしコンパクトになりましたので、オフィス、お店など設置いただける場所がありましたら、お知らせください。

発行：認定NPO法人 ビープルズ・ホープ・ジャパン

発行責任者：廣見公正 編集人：南部道子 発行日：2017年2月10日

連絡先：〒180-8750 東京都武蔵野市中町2-9-32 TEL:0422-52-5507 FAX:0422-52-7035

ホームページ：<http://www.ph-japan.org/>

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。